市長賞

風が吹けば桶屋が儲かる

古川深青

「こんにちは。」
暖簾をくぐって中に入ると長い髪を後ろに束ね、朱色の浴衣を着たおじさんがいた。奥の一段上がった所に座り、ケロリン桶を覗き込むように持っている。
「いらっしゃい。おや君は？」
桶屋のオヤジは舌をペロリと出し唇を舐めた。
「桶を買い替えに来た。うちはそこで銭湯をやってるんだ。」
「桶を替えれば儲かるのか？」
この人、なんで俺が思ってることが分かったんだ？

「……儲かるかもしれない。」
店主のオヤジは長い舌をペロリと出した。
「お前んとこの桶はしっかり洗えばまだ使える。それに桶を替えた所で銭湯は何も変わらん。」
この人、うちの銭湯によく来るんだろうか。
「そんなこと、やってみなきゃわかんねーじゃん。」
「他に変えるところがあるだろ。」
「他のところなんて関係ない。じいちゃん達が色々やったけど何も変わんなかった。」
俺はぐっと拳を握った。
「そんなことはない。何かやれば、何かが必ず変わる。」
「そんなのわかんねーだろ。さっきあんた、桶を替えても変わらないって言ったじゃねーか。」
「銭湯は何も変わらないって言ったんだ。お前、風が吹けば桶屋が儲かるってことわざを知ってるか？」
風が吹けば？　どういうことだ？
「そんなの意味わかんねーよ。」
男は舌をペロリと出し、唇を舐めて言った。
「じゃあこんな話はどうだ？」

ビュウっと強い風が吹いた。
四月に相応しい軽やかな風。
桜の花びらのように机の上のプリントが舞う。
伸びた二つの手。
パッと顔を上げる。

風にそそのかされ、僕は恋に落ちた。

ドロっとした暑さを拭うように目の前でポニーテールが揺れる。

「ねぇ、今日も勝負する？」

彼女は勢いよく振り返って言った。

「いいよ。」

僕は笑顔で言った。

彼女の家は、僕の家の前の道を挟んだ向かいの通りにある。でもその道で小学校の校区が分かれていたので、彼女のことを認識したのは今年、中学一年生の春だった。出席番号が前後になり、なにかと話すことが多く、更に帰り道でお互い一人歩いてるところに出会い、僕らは仲良くなった。僕らの住んでいる近所には、同い年の子供が僕ら以外にいないのだ。同じ時間に部活が終わり、同じ頃学校を出るので、大抵みんなと別れた後にどこかで合流し、一緒に帰る事になる。たまに、家の近くの古びた駄菓子屋の自動販売機の横にあるベンチに座り、二人でジュースを飲んだり、駄菓子を買って食べたりするほんの三十分程度が、僕のささやかな楽しみだった。最近は六月なのに気温が高いので、二人でアイスを食べる。ジャンケンで負けた方が勝った方にアイスを買う、これが僕らの最近のお決まりだ。

「じゃあまた後でね！」

彼女はそう言って教室を出て行った。僕は高揚する気持ちを抑え、カバンを持って部活へ向かった。

キーンコーンカーンコーン

チャイムが鳴る、部活が終わる時間だ。夕日で空はオレンジ色に染まっている。急いで制汗シートで体を拭

き、カバンを持って正門まで行く。正門では友達が楽しそうに喋っていた。
「ごめん、遅くなって。」
そう言うとみんなはいつものことだろ、と笑った。そしてゾロゾロと歩き始める。
他愛のない会話をしながら、カバンを振り回しながら、ゆっくり、ゆっくり家に向かう。

みんなと別れると、前を歩く彼女が見えた。チリチリと鞄に付けた鈴の音が聞こえる。
「おーい。」
僕は彼女を呼ぶ。彼女は僕の声に気づき振り返り、立ち止まって手を振った。
「おつかれー。」
僕は小走りで彼女の元に向かい、いつものように授業の話や部活の話をしながら歩いた。
「まだ六月なのに、こんなに暑いなんてね。」
「ほんと、この先どうなっちゃうんだろう。」
彼女の真っ白な夏服が夕日を反射して、僕は目が眩んだ。
駄菓子屋に着き、中に入る。埃っぽい店内で僕らはアイス売り場の前に行く。好きなアイスを選んでから、僕らの勝負が始まる。真剣勝負の一回勝負。仁義なき戦いの始まりだ。
『最初はグー、ジャンケンポン！』
僕はチョキを出す。彼女はグーを出す。
「やったー！　今日は私の勝ち！」
彼女は嬉しそうに僕にアイスを差し出し、よろしくね、と笑った。僕は悔しいような嬉しいような不思議な感情で返事をし、レジまで行った。
「おばちゃーん！　お会計！」

そうすると奥のガラス戸がガラガラと開き、おばちゃんが出てきた。
「おや、また来たのかい。こんにちは。」
「こんにちは。」
僕は彼女のチョコバーと自分のカルピス棒をレジの横に置いた。
「はい、百二十円ね。」
僕はお財布から二百円を出してお釣りをもらった。
ありがとうと店を出て、自販機の隣のベンチに座った。彼女の右に僕が座り、僕の左に彼女が座る。
「やっぱり夏はアイスだよね。」
袋を開けながら彼女が言った。
「まだ六月だけどね。」
僕と彼女は笑った。

「じゃあそろそろ帰ろっか。」
アイスを食べ終え、僕は言った。
「そうだね、もう暗くなってきたし。」
そう言って彼女は立ち上がった。駄菓子屋まで来たら、僕らの家はもうすぐだ。
春に比べて日が落ちるのがだんだん遅くなっていることを感じた。それに伴った彼女と別れる時間も。そのはずなのに、自分の中の時間はどんどん早く過ぎてしまう。僕は沈みかける太陽を睨み、沈まないでと祈るばかりだった。

彼女との日々は問題なく進んでいた。放課後に立ち寄る駄菓子屋には、一日置きくらいに行くようになった。

最近は駄菓子屋さんでかき氷を売り出したので、それを並んで食べるのだ。

僕はいつものように、友達と別れて一人で歩いていた。すると後ろからチリチリと鈴の音が聞こえてくる。

「おーい。」

彼女が僕を呼んだ。

「今日は何にしようかな。」

「私ブルーハワイ。」

「じゃあ僕はイチゴ。」

『最初はグー、ジャンケンポン。』

「今日は僕の勝ちだ。よろしく。」

「あーん、今日は私か。おばあちゃーん、かき氷二つ。」

いつもの会話、いつもの帰り道、いつもの幸せな時間。いつもと違うのは、いつのまにか自販機の横に飾られた、透明な風鈴だった。

僕は舌が青い彼女を笑う。

「風鈴、綺麗な音だね。」

「うん、夏って感じ。」

「私、鈴の音が好きなんだ。」

「普通の鈴？」

「そう、鞄にも付いてるし。」

彼女はそう言ってピンクの紐の鈴を揺らした。

「いいね。」
「うん。あ、私誕生日に新しい鈴が欲しいなぁ。これ、小学校の頃から付いてるし。」
もうすぐ彼女の誕生日なので、僕は何か欲しいものある？　と聞いていたのだ。その答えが今返ってきた。
「鈴かぁ、どんなのがいい？」
「何でもいいよ！」
彼女はそう言ってコロコロと笑う。
どんなのがいいだろう。今度の土日に買いに行こう。

「そろそろ帰る？」
あぁ、沈んでいく太陽が憎らしい。
「そうだね。」
色んなことを考えながら、僕は彼女と別れた。

日曜日、自転車を少し漕いで駅前まで行き、僕はデパートに入った。中はクーラーが効いていてヒンヤリとしている。
鈴ってどこに売ってるんだろう。
お店の案内板の前をウロウロして、とりあえず雑貨屋さんに入ることにした。
鈴、鈴、探してみるが目ぼしいものはなく、なかなか見つからない。
違う階にある雑貨屋さんも見てみたが、彼女の鞄に似合いそうな鈴はなかった。
お土産屋さんとかの方が良いのかなぁ。
僕は諦めて外に出た。ジワっとした温かさが体を包み、自然と汗が溢れてくる。太陽を一瞥し、だるくなっ

た体を連れて自転車置き場へ歩く。
すると、チリチリーンと近くで風鈴の音が聞こえた。
僕は音がする方を見た。道路の向かいに風鈴がかかったかなり古いお店がある。何を売ってるんだろう。覗いてみようかな。
そう思って横断歩道まで行き、向こう側に渡った。お店の前には竹でできた日よけが立て掛けてあり、その隣に大きな水が張ってある桶がある。中には金魚と藻が浮いていた。猫を防ぐためか、金網が張ってある。とても綺麗にしているようで、汚れは一切ない。そんなお店には、ひと昔前のような雰囲気が漂っていた。暖簾をくぐって中に入る。
「いらっしゃい。」
そう言ったのは長い髪を後ろに束ね、朱色の浴衣を着たおじさんだった。奥の一段上がった所に座り、金魚鉢を覗き込むように持っている。
土間の部分には沢山の桶や柄杓、水槽、バケツなど、大小様々な入れ物が置いてあった。
「おや、珍しい若いお客だ。風に吹かれやってきたのかい？」
おじさんはペロリと長い舌を出して唇を舐めた。
「あ、いや、風鈴の音が綺麗で、少し覗きに……」
ここには誕生日プレゼントになりそうなものはないので、すぐに帰ろうと思ったのだが、お店の人に話しかけられるとは。
「君はまだここにあるものは必要ないみたいだ。」
僕はドキっとした。
「えっと、はい。」
「はは、素直でいい。君は何を探しているんだい？」

「あ、鈴を探してて、」
「うーんそうか、鈴ね。それならここの近くの和風の小物屋へ行くといいよ。きっと君の欲しいものが見つかる。」
おじさんはまた舌をペロリと出して笑った。
「そうですか。それなら行ってみます。」

「君は風が吹けば桶屋が儲かるということわざを知っているかい？」
帰ろうとすると、後ろから声がかかった。
「いや、分からないです。」
僕は振り返って答える。
どうして風が吹いたら桶屋が儲かるんだろう。
「一見全く関係ない所で思わぬ影響があるということの例えさ。」
「そうなんですか。」
「君はまたここに来ることになるよ。」
おじさんはペロリと唇を舐めて笑う。
「え……。」
「あぁすまんすまん、引き止めてしまったね。」
おじさんは申し訳なさそうに頭を掻いた。
「あぁ、いえ。ありがとうございました。」
そう言って僕は暖簾をくぐって外へ出た。不思議なおじさんだったけど、僕は教えてもらったお店に行くことにした。

お店まで着くと中からお線香のような香りが漂ってきた。オレンジの灯りが店内を包み、まるで夏祭りの夜のような雰囲気を醸し出している。売られているものは櫛や鞄、浴衣や帯など、このシーズンならではのものだった。このお店の中だけずっと夏祭りをしているような楽しげな雰囲気、気づけば僕はお店のものに夢中になっていた。

しかし、鈴はなさそうだったのでそろそろ出ようかと思ったところ、ふと目に入ったのは簪コーナー。どれも夏っぽくてかわいい品ばかりだった。その中でも僕の目に入ったのは一本の簪。シンプルなピンクの玉の先に、短い鎖で鈴が付いた簪だ。それを見た瞬間僕は買うと決めていた。

きっとあのおじさんが言っていたのはこの簪のことだろう。でも、なんでこのアクセサリーショップをオススメしてくれたんだろう、まるで、女の子への誕生日プレゼントを買うって分かってたみたいだ。それよりも彼女は喜んでくれるだろうか。不安を感じながらも、彼女の誕生日が待ち遠しくて仕方がなかった。

誕生日の放課後、僕は駄菓子屋で彼女にかき氷を奢ったあと、紙袋に入れた簪を渡した。彼女はありがとうと袋を受け取り、中から鈴の音がすると喜んだ。

「今開ける？　それとも家に帰ってからの方が良い？」

彼女は聞いた。僕は悩んだ挙句、彼女の反応を見る怖さが勝ち、後者を選んだ。

「そっか、じゃあ家に帰ってから見るね！」

その日、僕はドキドキして中々寝付けず、月明かりに照らされた天井とひたすらにらめっこを続けた。

次の日の朝、前に座った彼女の鞄の横ポケットに、僕のあげた簪が刺さっていた。

「おはよう！　相変わらず暑いね。」

彼女は爽やかに笑った。

「お、おはよう。」
僕は満面の笑みを隠す為、下を向いてしまった。

放課後、一人で歩いていると、後ろからチリチリと音が聞こえてきた。鈴が前よりも小さい為、音が少し高い。
「おーい。」
彼女が手を振っている。僕は立ち止まって彼女を待った。
「これ！　ありがとう！　とっても可愛い！」
彼女は鞄を僕に見せた。
「喜んでもらえて良かったよ。」
きっと夕日が僕の赤面を隠してくれているだろう。
「これ、今年の夏祭りでお母さんに着けてもらうね。」
「そうなんだ。」
夏祭り、そうか、もうそんな時期か。
夏祭り、きっと浴衣を着るんだろうな。僕のあげた簪を着けて。
「ねぇ！」
「ん？」
先に歩き出していた彼女が振り返って立ち止まる。

いつもは沈んで欲しくない太陽が、今だけは早く沈んで欲しくて仕方がなかった。

「っていう話だ。」
オヤジは得意げにペロリと舌を出し唇を舐める。
「は？　桶買ってねーじゃん。」
長らく話を聞かされてたのに、こんなオチじゃ納得がいかない。
「はっ、それはまだ先の話だよ。」
オヤジは馬鹿にしたように笑う。
「いや、意味わかんねーし。とにかく桶を売ってくれ。」
「お前に売る桶はねえよ。持ってる桶を綺麗にして、それでも足りねえくらい人が入ってから出直せ。」
意地の悪い笑みでペロリと舌を出した。
このままじゃ埒があかないので俺は一回帰って違う店に行くことに決めた。
「繁盛させてまた来いよ。」
背後から声がかかる。
「うるせえ！」
俺はそう言って暖簾をくぐり外へ出た。
古びた銭湯の前に着く。
ビュウっと強い風が吹き、斜め上からベコベコっと嫌な音が聞こえた。枠から外れた看板がユラユラと揺れている。
まずはこれを直すかな。

「懐かしいね、このお祭り。」
彼女の簪の鈴がチリチリと揺れる。
「久しぶりの地元は良いね。お前は初めてだな。」
僕は息子の小さな手を握りながら言う。
「そういえば、この辺は垢舐めっていう妖怪がいるらしいーなんて噂、あったわよね。」
「あぁ、懐かしいなぁ。」
「アカナメって何？」
「風呂場に住み着いて、風呂の汚れや心の汚れに取り憑く妖怪だよ。」
「へぇ〜。」
「懐かしいわ。ねぇ、来年もまた帰ってきましょうよ。リニューアルオープンしたっていう銭湯にも行ってみたいし。」
彼女が出会った頃の、十年前のように無邪気に笑う。
「そうだね。もしかしたら垢舐めにも会えるかもしれない。」
僕もなんだか若返った気がした。
「お父さん、僕金魚掬いがやりたい！」
息子は僕らの話に興味がないらしく、もう屋台に釘付けだ。
「久しぶりにやる？」
彼女が楽しそうに言った。
「そうだね。」
懐かしい遊びに親子三人ですっかり夢中になってしまった。

「たくさん取れたー！」
息子が楽しそうに笑う。
「そうね、しっかりお世話できるかしら。」
「じゃあまずは、飼う為の入れ物が必要だね。」

どこからか、ビュウっと強い風が吹いた。